

## 共通テーマ：多文化共生社会を考える

### 第2回 民主主義社会オーストラリアは多文化共生社会 !!

2024年6月22日（六本木校地にて）

関根 政美（慶應義塾大学 名誉教授）

「はじめに——なぜオーストラリア研究なのか？」

ただいまご紹介に預かりました慶應義塾大学名誉教授の関根です。今、移民研究や多文化主義（とくにオーストラリア多文化主義）研究で、関根先生は先端を行っていらしてなんてご紹介いただきましたが、その通りです（笑）。ただ、その通りなのです……が、残念なことに、オーストラリア研究は人気なくて、研究者が少ないんです。米国とか、中国とか、ロシアとかの地域研究だと、講演にも皆さん聞きに来るし、研究者も多いんですが、オーストラリア研究者は少ないので、なんでもすぐ第一人者という訳です。東洋英和の先生方にもオーストラリア研究をお勧めします。すぐ第一人者になれます。かつて、東大法学部からですね、ちょっと手柄話みたいになってしまうけど、授業を頼まれた時に、「関根先生……、関根先生の授業の履修者数は法学部全授業中の下から2番目ですといわれました」。出席者は20人ぐらいだったんです。履修登録者数は40人もいたんですけどね。「じゃあ、一番来なかった授業はどこですかって？」聞いたら、カザフスタン研究ですといわれました。「どこにある国だかわかりますか？」。それはともかく、同地域の先生とビリ競争したのです（法学部の学生数は1000人前後ですか？）オーストラリアは、もうちょっと注目を浴びてもいい

いのではないかという気がするのですけれども、残念ながら浴びて来なかったのです。研究対象としては、話題は豊富ですが……。愚痴はこの辺までにして、とりあえず講演を進めます。

一応、「民主主義社会オーストラリアは多文化共生社会」ということでお話をしますが、現在のオーストラリアは、だれが見ても民主主義社会です。だけど、なんで「民主主義」という言葉をわざわざ講演タイトルに入れたのかということは、後で説明します。

ところで、私のパワーポイントのスライドでは、いつも緑とか、ちょっと濃い黄色を基調に使っていて、驚く方もいるようですが、これはオーストラリアの国の色なんです。黄色（私のスライドでは黄色ですが、本当は明るいゴールド）と緑は、各種のスポーツ選手のユニフォームの基調色になっています。ところがちょっと厄介なのは、南半球にあるアルゼンチン、ブラジル、南アフリカなどの選手のユニフォームも似た色を使用していることです。しょっちゅう間違えてしまいます。「おお、やっている。やっている。オーストラリア頑張っている」と思ったら、ブラジルだったりしてがっかりです。南アフリカとオーストラリア、かつて人種差別国家だったのだから、よく似ているなという感じはします。が、それはともかく、とりあえずちょっと派手な色を使いますが、ご勘弁願いたいと思います。今年のパリオリンピックでも、だいたい黄色と緑色を基調としたユニフォームですので、ぜひ見てください。ところでコロナの間はぜんぜん講演依頼はなく、今日は久しぶりに呼ばれたものですから、しゃべりたいことが一杯あります。それで用意したスライドがちょっと多すぎるので、話はけっこう飛ばします。興味が湧けば後でゆっくり配布資料を参照してください。

それでは早速「はじめに」ということで、私の紹介も含めて話を進めたいと思います。実は2023年が。本当は今年だともうちょっと良かっ

ただのだけれど、その年は、オーストラリアで初めて多文化主義という言葉が政府から出て、これから「オーストラリアは白豪主義をやめて多文化主義で行きます」と示唆された年です。ところで、「白豪主義」って知っていますよね。最近の若い人は知らないんです。かつて、オーストラリア大使館に頼まれて、「授業で白豪主義という言葉あまり使わないでくれ」って言われたことがあるのですが、それを使わないとオーストラリア史のこと、何しゃべっているかわかんなくなってしまうので、よく使っています。これは、南アフリカのアパルトヘイトみたいなもので、白人以外はオーストラリアに入れませんよ、つまりアジア人とアフリカ人は、オーストラリアに住んでもいいけど、公民権はあげませんよという人種差別政策です。それは1901年から1960年代半ばまでしっかりやっていたものですが、「それをやめて多文化主義を導入する」と表明したのが1973年です。去年がちょうどそれから50年経ったということです。

私が最初にオーストラリアに訪問研究員として留学して勉強した時が1980年から83年で、ちょうどオーストラリアが多文化主義を本格的に導入した時期です。それからずっとこのテーマで慶應大学の授業をやっていました。他にやることもないし、また他のテーマでオーストラリアを論じて、誰も聞いてくれませんでした。たまたまこの多文化主義という言葉については、1980年代に外国人に対して労働開国を迎えていた日本では、政府も国民もちょうど興味をもちはじめた時期でしたので、注目されました。それから50年近く経ってしまいました。私がオーストラリア多文化主義の研究を本格的に始めたのは帰国した年の1983年からですから、オーストラリアの多文化主義を在職中40年近くも見続けてきたのは私以外いないと思います。その意味では第一人者だといえるでしょう。

「なぜ73年にオーストラリア政府が多文化主義を入れると表明し

たのでしょうか?」。第二次世界大戦後の1950年代、60年代に、オーストラリアはヨーロッパからたくさんの移民や難民たちを受け入れたのですが、その時代はまだ白豪主義時代だったものですから、ヨーロッパから来た白人系の移民や難民さんたちに対しても、白豪主義のもとオーストラリアはけっこう差別したのです。とくにイタリア人やギリシャ人に対して、「お前たちは英語を覚えなどて、そしてイタリアやギリシャなど故国の民族文化を忘れて、早くオーストラリア人になれ」って言っていたのです。それは白豪主義の下の半ば強制的な同化主義で、要するに英国系オーストラリア人になりなさいということでした。しかし、ちょうど60年代後半から、それをやっていたことから、いろいろ社会問題が起きてきたのです。要するに、移民・難民さんたち、ヨーロッパから来た人たちの社会不適応問題が起きてしまったのです。

白豪主義に基づく同化主義に対してヨーロッパ系の移民や難民さんたちが怒り出したわけです。「イタリアとかドイツ、フランスの文化とオーストラリアの文化を比べてどっちが上だと思いますか?」。文化的に格下の連中に、「俺の方の文化が上だから、我々の文化に同化しろ」と言われたら普通怒ります。ヨーロッパ系の人々は、大いに不愉快だと言って、帰り始めてしまったのです。とくに60年代になると沢山帰り出したのです。その頃、60年代にヨーロッパの経済復興が進んできたことも影響しています。せっかく来てくれた移民・難民さんたちに帰られては大変だということで、「わかりました!!」ってことで、慌てて連邦政府は同化主義をやめて、「あなた方の文化も大切にしますよ」という「統合主義」を一旦入れたのです。それでも不満だったヨーロッパ系の移民・難民さんたちは帰ってしまうので、オーストラリア連邦政府としては、「しょうがない、これは白豪主義がまずいだろう、彼ら彼女らのほうが文化的にも知的にも高いのに、あな

た方の文化や言語を忘れて我々の文化・言語を覚えろ、だなんて言ったら、絶対怒るだろう」と考え直したのです。ヨーロッパ系の移民や難民さんたちに、強制同化主義的なことを平気でやるオーストラリア人は、世間知らずの田舎者だと思われても仕方ないと反省したのです。

だいたい世界史中心の歴史教育をきちんとしてないのですよ。英国中心の世界史を重視するオーストラリアだから、皆ヨーロッパ系の人たちは帰ってしまうのです。さらに1960年代、70年代というと、アジア太平洋、とくに東南アジアや日本が経済的に発展してきたので、それらの国々ともお付き合いしなければいけないということになって、白豪主義を停止すると示唆せざるを得なくなったのが1973年でした。そして、統合主義は不人気なので、これではだめだということで「多文化主義」を導入したわけであります。

1973年に多文化主義を入れますよと表明して、1980年頃から本格的に導入して、それから既に40年以上経つわけですが、残念ながら、オーストラリア政府が多文化主義を一生懸命頑張って維持してきたのですが、最近になって、これはオーストラリアだけの話ではなくて、多文化主義的なことをやっていた他の国々でも同じなのですが、多文化主義への反発が非常に強くなってきていて、どちらかという衰退していると言わざるを得なくなっています。今日のお話はその辺のことを含めたオーストラリア多文化主義の盛衰史の全体的な流れを追っかけてみようかなと思っています。ただ、「オーストラリアの多文化主義は今、ちょっとやばいんだよね」、なんて言うと、けっこう喜ぶ方が日本には多いので、あんまりしゃべりたくはないんです。けれども、実際になぜ衰退現象が起きたのか、その辺のところもじっくり見ると、今後、日本で多文化共生を発展させるには、どういうところに注意すべきかよくわかるんじゃないでしょうか。ということで、一応、オーストラリア多文化主義の歴史を中心にしたお話をしていきたいと

思います。

ところで今の私の話を聞いて、「基本的にオーストラリアの多文化主義はダメだ。じゃあ日本の多文化共生もダメだよ」、なんていう短絡的な議論はしないでいただきたいと思います。実際、日本は少子高齢化、人口減少、労働力不足といった難問を解消しなければならない時代になっています。このような社会問題の「即効薬」の一つとしてやはり外国人受入れを考えないわけにはいかなくなっているという、そういった時代になっているということは忘れないでください。「外国人が増え多文化共生すると、日本の伝統文化が壊れる」なんて「暢気なこと」言っている場合ではありません。ただ日本の伝統文化で商売されている方にはきつい話かもしれません（でも、外国人が増えると日本文化が失われるというのは本当でしょうか？）

それではオーストラリアの話を始めたいのですが、その前に「そもそもオーストラリアのこと知る必要あるのか？」という話をちょっとだけさせてください。聴衆の皆さんのなかにはオーストラリアと関係をもっていて、よく知っているという方もいらっしゃるでしょう。なんでオーストラリアを勉強しなくてはいけないのかというと、その理由はいくつかあります。まずは、日本とオーストラリアはかなり関係が強い。つまり伝統的で安定的な経済パートナーであるという理由からです。さらに、最近、新聞でもインド太平洋問題、つまり、中国の太平洋進出問題が盛んに報道されていますが、日豪の政治安全保障面での協力関係が非常に大きくなってきて、クワッドとかオーカスなどよく聞きますよね。日本にとってもオーストラリアにとっても、お互いが重要な国になっているということもあります。オーストラリアのことを知らないと、日本人としてもちょっとまずいのではないかと思います。

オーストラリアとの伝統的な経済関係について、私自身の紹介を含

めてもう少しお話しさせてください。ここで少しスライドを見てください。これらを見ると、要するにオーストラリアから日本にとって食料・原材料になる諸資源が大量に輸入されてきて、そしてそれらを日本が消費するだけでなく、工業製品に加工して世界中に輸出しているという関係が分かります。戦後、日本が経済成長すればするほど、オーストラリアから食料・自然・エネルギー資源の輸出が増え、ついでにオーストラリアも経済的に発展をするという強い「補完関係」にあるんです。ただ問題は、経済的にお互い重要ですけども、原材料の多いオーストラリアからの輸出品は日本の消費者にはほとんど目立たないのです。オージービーフとかオージーワイン、オージー米酒が最近目立つようになりなりましたけれども、その他は基本的に目立ちません。ところがオーストラリア行くと、やたらと日本の企業や商品の宣伝が一杯あり嫌でも目立ちます。ですから、お互いの情報格差が大きいんです。オーストラリアのほうは日本についてよく知っているけれども、コアラとカンガルーを除いて、日本ではほとんどオーストラリアのことが知られていないということになります。例えば、この部屋の電気や建物の材料の半分以上はオーストラリアに依存しているんですけど。つまり、石炭、鉄、ウランなどが来ているのです。さらに最近留学などを通して日本との関係も非常に強くなっていると言っていると思います。そして最近では、単なる補完関係から協力関係の時代に入っていて、オーストラリアの中国、東南アジア、あるいはインドとの貿易活動に日本も経済パートナーとして協力を拡大しています。そういう歴史と現状がありますから、2011年の東北日本大震災の時に、世界で最初にオーストラリアの首相が東北に慰問にやってきたわけです。この時のことは、日本でも随分評判になりました。「覚えてますか?」。伝統的関係から日本を心配して、真っ先に飛んできてくれるような国がオーストラリアだと言ってよいでしょう。

それからオーストラリア社会そのものが、多文化共生を研究する上でとっても重要だということが次の大きな理由です。オーストラリア人は意外と、「自分たちは世界の田舎っぺ」、とよく言うのですが、移民国家として、国際化とかグローバル化はけっこう進んでいるんです。その結果、多文化社会化が早くから進み、かなり早い時期から多文化主義を導入していました。以上の理由からオーストラリアを知る必要というのは非常に、私としてはね、大きいのではないかと考えています。日豪関係が重要な割には、日本人がオーストラリアのこと知らない、それでは困るということでオーストラリア政府は1980年代初頭になって「日本の大学に暇そうな先生がいませんか?」ということで、日本中探し始めました。そうしたら、「暇そうな先生」(つまり若いころの私が)が意外と近くにいたということで、私に接触して来たのです(慶應大学の隣の隣、そしてその隣がオーストラリア大使館でした)。そして「お金あげるからオーストラリアのことを大学で講義してほしい」というわけです。つまり、オーストラリア政府としては、1970年代には白豪主義がなくなっており、もはやオーストラリアは人種差別国家ではないということを、日本人に教えてほしいというわけでした。その結果、1983年に慶應義塾大学法学部に講座ができて、それ以来、私が担当していたのです。

そういった意味で、オーストラリアと日本との繋がりも非常に強いし、また日本にとって近未来の多文化社会がオーストラリアだといったような状況にあるということです。ですから、オーストラリアを知る必要ありますよ、ということです。でもね、私の書いた本はあまり売れていないんです。一生懸命、宣伝しているのですが、哀れと思ってお買い上げください!!

では、オーストラリアを題材に多文化主義についてお話をして、それが日本の多文化共生とどのような意味をもつかというお話をしてい

きたいと思います。

## 「民主主義」と多文化社会、そして多文化主義

オーストラリアの話の前に、日本でも急速に少子高齢化が進んで、もはや外国人を入れないとうまくやっていけないといった時代になったということ確認しておきましょう。ということで、本当はここで最近のそのような日本の状況を伝える日本の新聞記事をスライドにして集めていたんですけど、時間の都合上省略します。ただ、なかには女性が社会進出したから少子高齢化が起きたとあって、ちょっと女性蔑視的な記事も見受けられます。それはまずいんですけども、かつて安倍首相が高齢労働力、女性労働力、若年労働力を活用する「1億総活躍社会」を目指していたけれども、今でも労働力は足りない状況です。ということで、最近、人気のない岸田首相は一生懸命、少子化対策を提唱しているわけですが、やはりそれでも労働力不足は続いています。そして、ちょっとこのスライドを見ればわかると思いますが、あと20から30年も過ぎますと日本の人口は1億人を割るような勢いで、現在もどんどん減っている状況です。だいたい毎年40万～50万人くらい減っています。ですから、日本も外国人労働者を入れなければいけないことになってきたわけです（増えているのは外国人人口と高齢者のみです）。最近、読売新聞が、人口減対策としていろんなことやらなければならないと主張したなかに、外国人労働者受入も入れましようと言っているほどです。外国人労働者を沢山入れるとなると、その人たちとうまくやっていく共生が大きな問題になってくるわけです。

時々、「なんで外国人入れないといけないの、少子化対策で十分ではないか？」ということをおっしゃる方もいるんですけども、少子

化対策はその効果が出るのに時間がかかります。つまり、生まれた子供が大人になるまで20年かかる。今、少子化問題を解決したところで、今現在の労働力不足対策にはぜんぜん関係ないんです。今の少子化対策は20年、30年先のことをやっているわけです。だから、もしかしたら20年、30年経った時には外国人労働者を入れなくて済むかもしれないけれども、今なんとかしなければならなかったら、外国人しか答えはないよって話になってしまう。だから少子化対策のみではダメだし、もし、外国人を入れたくないから少子化対策を頑張るんだという議論であればさらに問題です。ある国際シンポジウムで、私の同僚が日本は少子化対策を頑張っていますという話をしたら、「それは人種差別ではないの」と言われて、びっくりしました。「なぜ外国人を入れないのですか？ 外国人入れれば労働力不足は簡単に解決するんじゃないのか」といわれたのです。「日本は同質社会指向ですから、やっぱり差別国家なんですね」と言われてしまいました。外国人はそう考えます。ですから、結局、国際社会のなかの日本社会を考えると、少子化対策だけではダメなんです。やっぱり日本は外国人入れない差別国家だと見る方が外国にはけっこう多いということです。もちろん受入れた人々に十分きちんと対応しないと、もっと差別国家だと言われてしまうんですね。ですから外国人受入は、日本が差別国家だと見られても困るという観点からも必要なのではないのでしょうか。

ところで、なぜ今日の講演タイトルに「民主主義」をわざわざ入れたのはなぜでしょうか。オーストラリア人に「民主主義社会だから多文化主義やっているんですか？」と聞いても、反応が薄くポカーンとしていることが多いのですが、民主主義社会では自由・平等とか、人権が守られているのですが、そのような国にはどういうことが起きるかということ、一文化社会ではあり得ないのです。ある人びとの文化・言語・宗教をあからさまに否定すれば、そのことによって差別が起き

ているわけですから、民主主義国家ではなくなるわけです。近年では、信条の自由とか思想・信仰の自由といったような問題だけではなくて、文化権（カルチュラルライツ）を認めていくということが当たり前のようになっています。このスライドにある新聞の記事を見ると、多文化主義をやっている国のほとんどが民主主義国家であることがわかります。そして、その民主主義度の高い国々では民主主義に対する不満が少ない。だから民主主義国家は割合多文化主義的な政策や、多文化主義類似の政策を導入している国が多いことが分かります。それで私は、やっぱり民主主義と多文化主義は関係あると思っています。つまり、民主主義社会なら多文化社会にならざるを得ないと確信しています。移民や難民さんたちのみならず、先住民族の人たちの文化・言語も対等に扱わなくてはいけないということですから。多文化主義的な政策を入れている国の多くが、民主主義国家であることが多いということは重要なポイントなんです。多文化主義は民主主義国家であることを強調しているに過ぎないのです。

もっともかつては、ちょっと前までは、そんなことあんまり考えていませんでした。民主主義国家のほとんどが白人中心の国で、白人以外の人が住んでいても彼ら彼女らの公民権は認められていないのが当たり前でした。白人だけであっても民主主義やっていれば、民主主義国家でした。だから、その民主主義を守るために人種差別はしてもよい、つまり、アジアやアフリカから来る人々の知能は低いし、教育や生活水準も低い。こんな連中と一緒にになったら大変な国になってしまう。だから排除するんだというわけでした。白豪主義というのはまさにそれでしたし、アパルトヘイトもそういうものであったわけです。そういった意味で、かつて白人の国が民主主義国で、かつ一文化社会が当たり前だったことに何の不思議も感じなかったんです。むしろ近代国民国家は民主主義と人種差別主義とが手に手を取って発展してき

たということです。

しかし最近では、そもそも一文化の国家、つまり同質的な国そのものが問題だということが、当たり前のように言われるようになってきたんです。昔の考えが今、否定されつつあって、多文化社会が当たり前になってきていて、そうでないと本当の意味での民主主義社会とは言えなくなってきたのです。たしかに19世紀の西洋は、アジア人、アフリカ人を排除しながら民主主義国家を一生懸命作ってきたわけです。でも今、それを見習ってしまうと問題です。民主主義を見習うのであれば、それは多文化社会であるということも忘れてはいけません。ちょっと海外ニュースを見るとわかると思いますが、イギリスやフランスで大きな事故やテロが起きた時の被害者が写っている写真を見ると、白人以外の人々が沢山います。白人だけが写っている写真はめったにありません。正直言うと、昔、オーストラリアの話をしている時、メルボルンやシドニーは白人以外の人々が30%位いるんですよ、オーストラリアってすごい国でしょうなんていって、1980年代は日本で得意になってしゃべっていたのですが、今や状況が大きく変わりました、シドニーやメルボルンは最近でも異文化者が増えています、ベルリンやロンドンではもっと多くなっています。国際放送を見た時に、あれ、ヨーロッパ諸国には様々な人種がいる、というわけです。パリオリンピックをみるとそのことがよくわかると思います。陸上選手や、ラグビーや、サッカーの選手の半分近くが白人以外のケースが多いのです。それが当たり前になっている。今でも民主主義を守るために白人のみの国を作るべきだと言っているのが、最近、ヨーロッパで頑張っている保守や極右の人たちです。そういうふうを考える人は、長年自分たちだけが民主主義をやってきたんだから、他の連中を入れたらやばい、という古い話をしています。民主主義社会はそういうことではいけませんよということで、否定するようになった国際社会に

なってきたのですから、必然的に民主主義社会ならば多文化社会であるといってよいでしょう。「じゃあ日本はどうなんでしょうか？」ということは、じっくり皆さんでお考えいただきたいなと思います。

だいたい世界の民主主義国家の主要都市、例えば、パリ、ロンドン、ミュンヘン、ベルリンなどに、外国人さんたちがどれぐらいいるかって調べてみてください。だいたい30%から50%です。ベルリンの外国人人口の70%はトルコ人です。オーストラリアのニューサウスウェールズ州全体では、統計資料では35~6%ですが、場所によっては50%超えます。そんななかで多文化学校も多く、あるところの校長先生が日本にやってきた時に、「我が学校では97%がムスリムです。そして、ついにこの間、ほんの一か月前ですが、白人家族の子女が3組入りました。3組も入ったんですよ」と言って大喜びしていたのです。多文化が当たり前とはいえびっくりです。

ここで民主主義という言葉にこだわるのは、民主主義は自動的に多文化社会を生み出すからで、アジア人やアフリカ人を排斥しながら民主主義国家ですというのは自己矛盾です、ということだからです。その他にもう一つ重要なことは、多文化社会で民主主義国家であれば国際移民を受け入れざるを得なくなるということです。つまり、「国際移民の時代」になってきたということです。しかも先進国は少子高齢化、人口減社会ですから、やっぱり外国人が増えてきて多文化社会になりますよね。この話で気が重くなったと感じる方もいるかもしれないけれども、重要なことです。

先にお話した通り、オーストラリアも19世紀の終わり頃から1960年代まで、基本的に白豪主義国家でした。アメリカもカナダもニュージーランドもみんな同じ頃似たことをやっていたのです。これらの諸国では1960年代にやっぱりそれはまずいということで、差別的な移民政策である白人中心主義をやめて、非差別的な移民政策を導入せざ

るを得なくなったのです。そのなかで、カナダとオーストラリアは、多文化主義を単なる移民への生活支援とか福祉支援を意味するだけではなくて、「我が国は多文化国家です」というように「国民統合のシンボル」として多文化主義を採用しています。これは日本では絶対やっていません。日本政府は絶対認めないでしょう。ただ、西洋の他の国々も極右やポピュリズムの台頭により、日本のそれに似た方向に進んでいるのは残念なことです。

### なぜオーストラリアは多文化社会となったのか？

それではここでオーストラリアの話をしましょう。オーストラリアの歴史は、このスライドに見られるように三つに分けられます。最初にアボリジナルという先住民族の人々の時代から始まります。アボリジナルの人々の存在が古いことを強調する先生は7万年ぐらい前から住んでいたとしています。しかし、1788年からホワイト・オーストラリアの時代になりました。英系白人が1788年から入植したからで、先にお話ししたように1960年代からは白豪主義をやめて多文化社会になりました。今はマルチカルチュラルオーストラリアの時代といってよいでしょう。だいたいオーストラリアは歴史をこのように3つに分けて考えればよいのではないかと思います。現在は一応、多文化社会オーストラリアの時代と言えるのではないかと思います。2008年に先住民族に対して歴史上ひどい扱いをしたことを公式に謝罪するとともに、このスライドにあるように、最近では先住民の旗を認めるだけでなく、現在のオーストラリアの国旗に、いずれはアボリジナルの国旗をくっつけて、新しい国旗を作ろうという案も出ているほどです(英国国家から多文化・多民族国家へ)。

そして現在、オーストラリアは白豪主義を捨て。アジアや太平洋地

域とお付き合いをするようになったものですから、文化面でもアジア太平洋国家化しているといつてよいでしょう。経済的にもアジア太平洋国家となり日本との繋がりにはさらに強くなっています。つまり、戦後、英国との関係が弱まっているんですが、そういった動きとの関連で、オーストラリアには今や世界中から移民がやってくるようになっています。当初は英国やアイルランド、つまり英国系の流刑植民地でしたから、英国系国民の移住が多かったんですが、第二次世界大戦後はヨーロッパから移民や難民さんたちが沢山入ってくるようになりました。そして最近ではヨーロッパや英国、アイルランドの人々の入国数が減り始めて、むしろ中東、アジア、インド、インド、パキスタン、バングラデシュなどから沢山入ってきています。さらに最近では、アフリカやオセアニアからも沢山入ってきています。オーストラリアとしては、本当は、日本人にも沢山来てほしいんです。アジアからくる優秀な人たちが多いのだけれども、それでも不足しているのです。少子高齢化して人口も減っている日本には、けっこう一人っ子の男子が多いものですから海外進出に消極的なんです。女性は一人っ子でも海外にひょいひょい行くんですよ。だけど男の子の場合一人っ子だと親も留学にさえ消極的なものですから、オーストラリア側としてはイライラしているようです。「関根、なんとかしろ。学生、騙してでもいいからオーストラリアに行くように説得しろ」とよく言われました。でも、オーストラリアでもテロの危険はあり、一時的にも逡巡していた記憶があります。

日本はどんどん少子化が進み、つい最近、日本の出生率が1.2という数字が出てしまいました。東京は0.99ですから、もう子どもを産んだところでどうしようもないんです。だけどオーストラリアは移民が多いものですから、そしてその移民の子どもたちの数も多いので1.6です。これでも随分少なくなりました。オーストラリアはしゃかりき

になって、移民を増やそうとしています。世界中から入れてきたもの  
ですから、最近オーストラリア政府がオーストラリアの国はこんな国  
ですと紹介する時に、このスライドのような写真を使います。もう白  
人だけの写真を使えません。紹介写真では、アジア、アフリカ、オセ  
アニアから来る人々の数のほうが大きくなっています。オーストラリ  
ア国民の半分以上が移民系ですから。両親および両親のどちらかが移  
民だという人が人口の半分近くいるのです。むしろ両親含め皆オース  
トラリア生まれの人口が少なくなっていると言ってよいでしょう。で  
すから、白豪主義オーストラリアはもうやめて、アジアとの関係を深  
めたアジア太平洋多文化主義国家ですと、オーストラリア政府もオース  
トラリアのことを説明しているんです。そして、国会議員のなか  
でも多様性は進んでいて、議員に海外出身者系の議員が 15%います。  
女性はもう半分近くいまして上院議員では、むしろ女性のほうが多い  
のです。多様性においては圧倒的に日本を凌駕していると言ってよい  
と思います。日本は今、一生懸命、多様性重視だとか言って、女性議  
員や経営層を増やせと言っていますが、ぜんぜんお話になりません。

## 多文化主義オーストラリアの風景

ということで、オーストラリアが非常に多文化社会になっているこ  
とが分かる写真をちょっとここでお見せします。私はシドニーで長い  
間、生活したことがあって、あんまりメルボルンのことはよくわかり  
ませんので、シドニー中心の写真で申し訳ないんですけど、多文化社  
会ということではどこでも同じです。まず、オーストラリアは白人国  
家ですので白人が多く写っているスライドから見てみましょう。この  
スライドはエリザベス二世女王が最後にオーストラリアを訪問した時  
(1986年)の写真です。オーストラリアは多文化ですけど、不思議な

ことに報道写真を見てこの時だけはこんなにたくさんの白人がいるんだと、私もびっくりしました。キャンベラやシドニー中の白人がワックと握手を求めて一斉に集まってくるし、この写真に写っている子どもたちもみんな白人です。どこにもアジア系がいません。このような光景を見るとオーストラリアはやっぱり白人の国なんて思うことがあるんですけど、街のなかをあちこち歩くと、中国人街があったり、お店の看板を見ると漢字があったり、ハンゲルがあったり多文化です。これはケバブ料理の店でムスリム系です。「英語の看板もあるじゃないですか？」って言ったところ、オーストラリアの人に「いや、あれはみんなインド系の店です」っていわれました。英語を使うのはインド系です。ですから、日本語を使った看板のお寿司屋であっても、その多くは韓国系の人がやっているといっってよいでしょう。

また、ちょっと郊外電車の駅を降りると、このスライドのように多言語のばかでかい看板がズラーっと並んでいる郊外の町が当たり前の社会になっているんです。カブラマッタという町では、人口の50%超がアジア系なのですが、そこに住む白人は英系ではなく東欧系が多いのです。アジア系が多いので、町のほうも熱心に、「アジアに行かなくてもカブラマッタへ来れば、アジアのこと半日ぐらいでわかる」と、ちゃっかり宣伝しています。このスライドに見られる看板はもうなくなってしまうかもしれませんが、カブラマッタ以上に人口が多様な郊外は増えています。町のいろんな看板を見てきたわけですけども、こんな感じのところを中心にシドニーを見ると、多文化だになってことがよくわかると思います。そして、シドニーの町の至るところにアジア系文化があると言ってよいでしょう。このスライドは仏教寺院ですね。この巨大なお寺の敷地の端っこのほうに、かつては巨大に見えたオーストラリアのキリスト教会が小さく見えています。これらのスライドは仏教寺院です。これはカンボジア系、これはベトナム

ム系、これはトルコ系のイスラム寺院ですね。こういうような風景が至るところにあります。これはギリシャ正教の教会です（ちょっと間違えましたか）。次のスライドはムスリム系の高等学校ですかね。行った日が日曜日だったので学生がいませんでした。残念でしたが、でっかい学校でした。こんなものが当たり前のようにできているんです。

今までの写真は私が撮った写真ですが、これから見るのは朝日新聞がオーストラリアを多文化社会として紹介してくれた写真です。私のものと似た写真ですけれども、西シドニー郊外の町のなかにもトルコ系とかアラブ系のムスリムがかなり増えていると理解できます。図書館に行くと、英語の本が少ないようにみえます。新聞もエスニックプレスが多い。このスライドの新聞屋さんの写真も同じですね。オーストラリア政府が発行するいろいろな刊行物の写真が、こういうタイプのものになっています。これは市民権付与の儀式の写真です。年1回行われるんですけど、その時の顔触れを見ると、もうアフリカ系ムスリムから東アジア系仏教徒までが勢揃いする多文化であるのが当たり前になっているといえるでしょう。それから、これはムスリムのファッションのスライドです。なかなか美人のファッションが洒落ていますね。

しつこいようですが、オーストラリア政府が、新しいオーストラリアの市民はこんな顔していますって紹介しているポスターをお見せします。次は年1回、「今年のオーストラリア人」ということでオーストラリア社会発展に貢献した代表的人物を選んでいるものですが、その時の候補者の顔触れを見ても、白人系がむしろ少ないと言っていると思います。それでは、「これは何のスライドでしょうか?」。これはオーストラリア公共放送から拝借した写真ですが、何をテーマとした番組かということ、最近のオーストラリアの少子高齢化と人口増加率の減少は、要するに女性が結婚しなくなったからだというものです。つ

まり、オーストラリアでも結婚する女性は少なくなって、独身女性が増えて子どもが減ったというのです。番組のテーマより、スライドにあるようにこの番組に登場するこの4人の女性が、みんなアジア系だと言うことに注目しましょう。彼女らが「オーストラリア人の代表として」話しているのです。「それぞれの出自が何人だかわかる人いますか?」。一番上の左端の人が日本人。あとは、パキスタン系。シンガポール出身中国系です。右下はサモア系で父親はイタリア系だけど母方にはアジア系を含む7、8個人種が混じっているようです。こうなると「そもそもあなたは何人ですか?」って聞くこと自体が、おかしいことになってきます(時には聞くこと自体が差別となります!)。彼女らがオーストラリア女性の代表として英語で話しているのです。オーストラリアの番組の作り方もこういった形になっているのです。それから最後にこれです。最近、メッカでたくさん巡礼している人の中で酷暑の中で500人ぐらい死んだというニュースがありました。日本に伝わっていると思いますけれども、その2日後のオーストラリア公共放送のニュースでは、そのなかにオーストラリア人が居ると伝えていました。やっぱり居たのか、居ないわけがないのです。死んだのはムスリム系ですから、死んだと伝えられた人はいわゆる純粋なオーストラリア人ではないでしょう。いずれにせよ。人口移動の点でオーストラリアはグローバル化しているので、世界で大災害、大惨事が起きますと、被害者のなかに必ず誰かが居るんです。世界のどこかでテロが起きれば被害者のなかにオーストラリア人が居ます(幸いなことに犯人のなかにはいないようです。疑われた人はいます)。報道でオーストラリア人って聞くと白人かと思うけれど、ぜんぜん違って中国系、アジア系であったりアフリカ系であったりすることが多いのです。

以上スライドで見てきたように、オーストラリアはこういう社会で

すから多文化主義を入れたのです。戦後、大量に移民を沢山ヨーロッパから入れた後、アジア太平洋国家になって、アジアとお付き合いせざるを得なくなってきて、白豪主義はまずい、とくに白語主義をやっているのは、未だ差別国家であると思われることが多かったものですから、多文化主義国家になりました、ということをごくどいほど強調せざるを得なかったのです。

### オーストラリア多文化主義とは？

そして、先ほど言いましたように、1973年にオーストラリア労働党のウィットラム首相が多文化主義採用を示唆したのです。そして79年、80年頃から保守党連合のフレイザー首相が本格的に導入していった、多文化主義国家となっていったのです。ただ多文化主義を導入した当初から多文化主義は意外とうまくいっていただけで、それでは反対が全くなかったのかというと、やっぱりありました。そのことについてもお話をしたいと思いますが、80年代、90年代と多文化主義がどんどん普及していくと、いろいろ反対も増えてきました。その結果、とうとう2007年に保守党連合のハワード首相の時代に、多文化主義は捨てないけれども、今までのような国民統合のシンボルとしてではなくて、これからは困っている移民や難民さんたちを支援するための福祉政策として、細々ではありますけど残しましょうということにしてみました。それまで「移民多文化省」という名称で大々的に移民を受け入れるだけでなく、多文化主義国家統合を標榜していたんですけども、2007年に移民省と多文化省を切り離し、移民多文化省は移民・市民権省あるいは国境警備省となりました。そして多文化省は福祉省の一部局となりました。

さらに、現在では移民・国境警備省も福祉省内の多文化局も2017

年に新しくできた内務省の一部となってしまいます。警察、国家安全保障、国境警備や国家の治安をつかさどる内務省が移民問題と多文化福祉を担当する形になったのです。日本とオーストラリアの研究者で多文化主義を研究していた先生のなかには、もはやオーストラリアは多文化主義国家ではないとはっきり言う先生も出てきました。私がそれを言ってしまうと私の仕事がなくなってしまいますので、一応あることにしています。私はまだオーストラリアは十分多文化主義国家であると思っています。その理由については時間があればしゃべりませうけれども、私としてはまだオーストラリアは、そもそも多文化国家で、連邦政府による公的な多文化主義は衰退しているとしても、州政府・地方自治体による公的多文化主義と、市民が日常的に維持している日常的多文化主義は生きています。たくさんの方々がうまく多文化社会のもと秩序立った生活を維持しているわけですから、日常的多文化主義というものも生きていないかと思っています。

オーストラリアの多文化主義は、基本的には1989年の連邦政府文書『多文化オーストラリアの諸課題』のなかで規定されています。その多文化主義の目標は三つあります。一つ目は移民や難民さんたちの文化的な独自性を尊重しないといけないということです。二番目の目標は、差別はいけませんという至極当たり前のことです。三つ目の目標は経済的効率です。一定の限度はあると思いますが、一定の枠のなかで文化的な伝統をみんなで分かち合おうという第1の目標は分かりやすい。そして二つ目は社会正義の問題ですから、これもわかりやすいと思います。実際、以上の二つの原則で十分なような気がしますが、「なんで経済的効率なんですか？」ということが気になります。

これについてよくよく考えてみると、意外に単純なことであることがわかります。つまり、「差別は非経済的である」ということなのです。

なぜ差別が非経済的なのかというと、移民や難民さんたちのなかに多くの優秀な人がいるかもしれません。いや、もしかしたら国民よりもはるかに優秀な能力をもった人が沢山いるかもしれません。でもその人たちを一律に差別していたら、有能な人材の無駄となるでしょう。もったいないではありませんか。能力のない国民を一生懸命支援するよりも、優秀な移民さんたちをどんどん入れましょうということです。だから経済的効率とは、差別をやめて、経済的に優秀な人をどんどん社会に参加させて、自立してもらって福祉依存から脱出するだけでなく、お国のためにどんどん働いてもらうことが必要だということです。だから多文化主義の大きな三つの目標のなかに、単なる文化的な独立性を守るだけでなく、社会的公正に加えて経済的効率目標が必要なのです。つまり、これが必要なのは有能な人材を有効に利用したいからです。経済的効率に関連してついでに言うと、文化の多様性は、様々なイノベーションに必要なとよくいわれますから、文化多様性の必要性を経済的効率の観点から考えることもできるでしょう。いずれにせよ、重要なことは、オーストラリアとカナダの多文化主義を考える時に、経済効率（エコノミック・エフィシエンシー）という言葉が非常に大切になってくるということです。だから多文化主義は、文化多様性、社会正義と経済効率の向上を柱としているんだ、ということをお忘れしないでほしいというのが、どうもオーストラリアやカナダの多文化主義の基本にあるのではないのでしょうか。

しかし、多文化主義はなんでもかんでも多文化を認めるのかというと、ここのところは注意してほしい。多文化尊重だからといってすべて認めるかというと、まず、オーストラリアの国益を無視されては困る。それから次はリベラルな価値。つまり、自由・平等（法の前での平等）、人権、議会制民主主義などを重視してほしいと言います。もともと民主主義から生まれたのが多文化主義ですから、その多文化主

義が非民主主義的なことを認めるわけには行きません。そして議会制民主主義と憲法を守りましょうということです。ところで、リベラル価値の尊重というところは意外と難しい。ここの部分でほとんどの多文化主義はガタガタしてしまいます。そして最後に、この権利と義務というのは、市民権の問題です。ここでは、自分の文化や言語が認めてくれるんだったら、隣人や受入国の文化も認めましょう。だから他文化を無視したり差別したりしないでほしいということです。以上は多文化主義の枠としての国益や西洋的市民的価値の優先についての議論です。配布資料にありますので、後でじっくり見ていただきたいと思います。

一定の枠の中で、多文化は認めますよということですから、男女平等を認めない文化についてどうするかということで、ムスリム系の人々といつも揉めることになります。また、ムスリム系の人々は世俗主義より宗教主義を重視するので、やはり大きな問題となりがちです。要するに多文化主義といっても、なんでもかんでも認めるわけではなく、特定の文化の人々にとっては、けっこうきつい枠があるということです。多文化主義だと言っているわりには、なんで我々の文化は認められないんだという不満は、どこにでも生じる可能性があるのです。だから、民主主義国家の多文化主義のもとでは、あなたの文化で民主主義的でないところは、徐々にでよいから直してくださいよということになります。ところで最近の世界調査では日本の男女平等状況は世界で118番目だそうです。これでも去年は132番目だったので少しくなっています。これでは、日本文化は女性差別文化なのでオーストラリアでは認められないことになってしまいますね。アハハって笑ってしまっていまいそうです。それはともかく、スライドのなかには、多文化主義の8つの目的ということで書かれた政府文書があります。それをそっくり引用したものが、配布資料のほうにあると思いますの

で、後で見えておいていただきたいと思います。

それでは、多文化主義の射程としてどのような政策やサービスが提供されているのかということについて見てみたいと思います、いくつかグループがありますが、①定住支援プログラム、②社会参加促進プログラムの二つはたいいていの移民・難民受入れ国にもありますから、これらをもって多文化主義プログラムとは言えません。むしろ、③移民や難民の文化、言語、宗教を維持・発展させるプログラムが多文化主義の中核となります。そのプログラムによってオーストラリアの伝統文化も発展させて行きましようというのです。ここで注意したいのは、移民や難民さんたちを助けるプログラムを発展させることのみを指して多文化主義政策であるというのではないということです。注意すべきは国民社会の多文化社会化に、国民の意識や国の諸制度を対応させていくことが重要になります。つまり、受け入れる側の人間と社会も変わらなくてははいけないということです、もはや一文化の同質的な社会の時代とは違う多文化な時代だから、それに対応できる人材と制度が必要になるということです。つまり、オーストラリア政府としては、まず国民に自分の国が変わっていくことを理解させなければいけないことになり、異文化間コミュニケーションを盛んにさせて、異文化間相互理解を進めなくてははいけないことになります。政府は様々な文化のお祭りをやったり、多言語による全国放送テレビやラジオを実施したりしています。移民や難民さんたちの言葉だけで放送するテレビ・ラジオ番組ではなく国民を対象としています。ただしほぼすべての番組には英語字幕が付きます。英語しかわからない人も分かるようになっていきます。一時期ですが、「おしん」が一番人気であったこともありました。

オーストラリア政府の多文化主義で重要なのは、自分たちが変わらなければ、つまり国民、組織、団体、諸制度が多文化社会に適応的な

ものにならなくてはいけないということです。この国民側も変わらなければいけないという議論に対しては、伝統文化をなくしてよいのかと極右が反応しやすいのですが、それはともかくも移民・難民さんたち困っている人々がそこにいるから、その人のたちにだけ対応すればよいというのではなくて、その人たちが沢山増えてくるのに対応して、国全体のシステムを変えることも必要になるということです。ですから、重要なのは、多文化主義は移民や難民さんたちがいる所だけで実施するのではなくて、全国で一律にやりましょうということです。実際一律にやらないと、一部の地域に移民や難民さんたちがまとまってしまいます。スラムの形成を防ぐためにも彼ら彼女らがどこに行っても困らないようにしなくてはいけないのです。オーストラリアの国民意識や社会制度も変えるとは。そういったことを意味します。多文化主義はその意味で移民や難民さんたちのための特殊なものであると同時に、国民主流側であるオーストラリアも全体として対応しなくてはいけないという意味で特殊主義と主流主義という二つの側面があるということです。つまり、二つの側面が揃わないと多文化主義はうまく行かないのではないかと、というのがオーストラリア多文化主義です。

以上基本のお話をしたので、ここで多少具体的な点に触れたいと思います。今、日本でも多文化主義に似た政策やサービスの提供を地方自治体や NGO、NPO などがやっているのではないかと思います。未熟な形でしょうが。ただ、オーストラリアでは始めから中央政府である連邦政府が率先してやっているんです。通訳サービスもみんなそうです。それから、最近では移民や難民さんたちのもっているさまざまな職業資格や教育歴もどんどん認めていきましょうということだけでなく、市民権（シティズンシップ、国籍）の付与も進めています。

さらに移民や難民さんたちの言語で自分たちのコミュニティのための放送、これはエスニックメディアといいますが、そういったものを

どんどん許可をしていくだけでなく、援助もして行きます。さらに、エスニックメディアの他にエスニックスクール、つまり移民子女のための学校、それからエスニックビジネス、これは自分たちのコミュニティの人たちのためのいろんな商売をするような人々も援助しますし、エスニック集団がまとまるための文化祭をエスニック祭りと言いますが、そういったものにも援助しています。それからエスニックコミュニティを維持するために、エスニックな専門職が必要だと思いますが。例えば弁護士やお医者さん、学校の先生、こうした人々をどんどん移民として受け入れています。お坊さんもどんどん入れています。ただ、オーストラリアではカナダと違って多文化法が制定されておりません。政府文書上での宣言ですから（政令）、カナダのように憲法のもとで多文化法を作っていません。確かにそのことによって、カナダの多文化共生がにっちもさっちも行かないところもでていますが、オーストラリアではまだそこにまでは行っていません。だけれども、こういった方向には進めているようです。

ここで多文化教育について質問です。「多文化教育っていうと、それは移民や難民さんたちの子女が自分の両親の文化や言語を勉強することですか?」。違いますよ。国民側が移民や難民さんたちの文化や言語を勉強することも含みます。それをオーストラリアでは義務教育でやっている州もあります。ですから、多文化教育は移民や難民さんたちが母国の文化や言語を学ぶだけではなく、それらをついでに周りの国民さんたちの子どもたちが勉強することでもあります。多文化教育には両方が入っています。「問題は、先生をどう調達するのですか?」ということですが、日本みたいに移民が少ないとなかなか近所で調達できないのですが、オーストラリアではそこら中にけっこうゴロゴロしていますので、ちょっとやってくれて言えます。学校で生徒10人の親が集まって、我が移民グループの言葉を教える授業を

作ってくれって校長先生に要求すると、校長先生は、「じゃあ自分で先生を探してきてくれ」と言って授業が成立します。それから政府は、移民たちのコミュニティの宣伝もしています。最後にオーストラリアのABC（公共放送）は、日本のNHKに対応する総合放送局ですが、これがコロナの時に何をしたかと言うと、多文化放送局（SBS）と一緒に、63言語で放送しました。NHKも最近いくつか、4、5個の言語での放送をやってはいますが、63個とは比べ物になりません。63言語のなかにももちろん日本語も入っています。もっとも63言語でも足りないと思います。

このスライドは、多文化主義をうまく導入できれば、近隣から国民国家、そして世界が多文化な平和な社会になること期待したものです。このスライドを作ったのは1983年です。その当時は、本気でこうなると思っていたんですけどね。本気で。でも愚かでした。今の世の中、ぜんぜん違うじゃん。保守や極右ばかり栄えているじゃんということですから。多文化主義に反対する連中ばかりじゃないですか（この皆さんのなかにも居そうですね）。正直言うと、私、多文化主義者たる多文化主義研究者だったんですが、最近は多文化主義に反対するポピュリズムと、右翼と極右活動のことばかり研究しています。最近、「関根先生の多文化主義論あんまり聞きませんね」とよくいわれるようになってしまいました。

## 日本の多文化共生とオーストラリア多文化主義を比較すると？

もう時間がなくなったので、話は配布資料の半分で終わります。文字通りの話半分ですいません。与太話が多すぎましたかね？ でも終わる前に日本の多文化共生について、オーストラリアの多文化主義の観点からみておきたいと思います。はい、それではここで。パンパカ

パンというファンファーレとともに皆さんに提示したいのは、本講座冒頭で私を紹介してくれた山本先生のご著書（山本直子『「多文化共生言説」を問い直す——日系ブラジル人第二世代・支援の功罪・主体的な社会編入』明石書店、2024年）を紹介します。何のために紹介したかということ、今まで話してきたオーストラリアの多文化主義と、今の日本の多文化共生は、同じかどうか、いや、違うのかどうか。その辺のところをちょっとまとめておきたいと思ったからです。私は、あまり日本のことを知らないことにしてあります。なぜそうなのかというと、オーストラリア人は日本が今でも同質国家指向の外国人排斥・差別社会だと思っている、多文化共生問題以前に外国人が増えているという事実すら知りませんから、日本の多文化共生について質問されたことがないからです。山本先生の議論を大いに参考にしたいと思います。

本書において先生はけっこう日本の多文化共生に批判的です。山本先生は、日本は多文化共生と言いながら、何をやっているかということ、まず一生懸命日本語を教えていると指摘します。そして日本語に加え日本の社会や歴史を教えて、早く日本の社会に慣れなさいとっていると指摘します。確かに、日本語教育の強調は当たり前のことで、絶対必要なことなんですけども、しかし、そればかりやっているというのはいかなるものか、というのが山本先生の議論です。ただ、このような疑問は彼女だけが指摘しているのではなくて、彼女の議論を支えるさまざまな日本の研究者も言っています。

もう一つの問題は、日本人と非日本語系の外国人の二項対立の問題です。あなた方は外国生まれの人間だと繰り返し、日本人と対比して、どちらかということ、あなた方海外出身者は日本語できない人々であると厄介視しているという側面があるのです。その結果、日本の多文化行政は非常にパターンリスティックとなり、すべて日本側が主導権を

握っていて、まず私の言うことを聞きなさいって高飛車になっているわけです。そして日本のことをまず勉強なさい。時には、あなたのお国の文化や言語を忘れなさいってという同化主義的なことさえ言っているのです。要するに支援者と被支援者との間に不平等な関係があって、言うこと聞けというような感じなのです。こんなこと言うと、真摯に一生懸命多文化共生やっている人は怒るだろうと思うからこれ以上言わないけれども、そういった問題があるということです。

ではなぜ「日本語ばかり教えていると何が問題なのか？」です。それは外国人たちの日本への不適応問題が起きるということです。しかも、その適応困難問題は、日本語がわからない、あるいは日本語を覚える意欲のない外国人さんたちが原因だって言うのです。それは犠牲者非難とよく昔から言われています。実はこれが日本の現況だということを、山本先生の本を読んでではじめて知ってびっくりしました。このような状況は1973年にオーストラリアが多文化主義を導入する前のオーストラリアの50年代、60年代の状況とそっくりだと思いました。ということは、日本の多文化共生は真の多文化共生ではないんだということです。これは、さまざまな社会問題の起因を外国人である移民や難民さんたち自身の方に見るという心理主義的な見方です。みんなあなた方が悪いっていうのは、かつてのオーストラリアとまったく同じです。50年代、60年代にそういうことを、ヨーロッパからの移民や難民さんたちにやっていたのです。そういうことを言われたヨーロッパ系の移民や難民さんたちは怒って、じゃあヨーロッパへ帰ると言って、多くがみんな帰ってしまったのです。それで慌ててオーストラリアは多文化主義を入れていったのです。

要するに、山本先生が指摘されるように、日本では日本語と日本文化を身に付けさせることを多文化共生だと言って言っているわけです。それは日本側にとって問題が起きないように、起きないようにしようと

するものです。そして日本の伝統文化や社会制度の変更を最小限にして、あなたたちが日本人に変わるんですよというのです。その代わり、日本語は一生懸命教えてあげますよという日本中心主義的同化主義なんです。実際は、外国人さんたちが日本に適用できないという時に、その原因には文化的な違いを含めて他にさまざまな問題があるわけですが、日本ではそれらの原因を外国人たち自身の日本語能力不足に皆おっつけている訳です。例えばオーストラリアでは英語を教えるという時に、ムスリム系の人たちに対して男女一緒にして授業をやろうとしたりしたら、反対されたのです。反対することを男女差別だと批判することも可能ですが、それぞれの文化の違いをうまく調整してやって行くことも考えなければいけないのです。そういった相互理解をしながらやっていくという観点が、日本の多文化共生にほとんどないのではないかと思います。それに比べると、オーストラリアの多文化主義は、真逆なことになっているのです。

基本的に多文化主義時代以前のオーストラリアで大きな問題になったのは、移民や難民さんたちの文化や言語を否定して、移民や難民さんたちのアイデンティティをズタズタに破壊しておきながら、いいオーストラリア人になりなさいというのは、ちょっと虫が良すぎるのではないかということでした。そのことに、オーストラリア連邦政府は気づいて、多文化主義へと移行したわけです。移民や難民系の人々からすると、不十分であっても自分たちの文化や言語、そして宗教をそれなりに尊重してくれる社会だと思える国では、自分たちの文化・言語、そしてアイデンティティを恥ずかしく思う必要がないと思えるのです。政府が文化的多様性を尊重しているなら、自分たちのアイデンティティも尊重してくれるはずだ、それだけよい社会だと思って、むしろ積極的に受入れ社会に適應していこうという気持ちになっていくわけです。だから、むしろ日本の多文化共生には大きな問題がある

といえるでしょう、一生懸命日本語を教えているのは分かるし正しいことです。日本語ができれば万々歳だけれども、しかし、それだけではいろいろな問題が起きるとというのが、オーストラリア多文化主義研究からいえることです。今の日本の多文化共生をやっていると、ますます問題が大きくなるのではないかということです。

山本先生の著作を読むと、けっこう暗いなという感じがします。暗いなというのは、日本がやっていることは40年以上前のオーストラリア政府と同じことではないかという感じがするからです。この点を指摘して、本講座を一応終わりにしたいけど、山本先生のご本の最後の5章でグローバル人材の問題が出てきていたので。ここでちょっと少し、私なりにひねくって多少とも明るい話で締めたいと思います。最近になって急にですが、もちろん多文化共生の問題に関してですが、日本政府が日本のグローバル化、グローバル経済への対応と発展のために、グローバル人材となる日本人を育てるんだということを言い出したことに関連します。実は、そのことによって、今まで厄介視されていたポルトガル語系のブラジル人移民二世の日本社会での立場が少し良くなっているということです。昔わたくしは、ブラジル人はブラジル語をしゃべるだなんて言って、笑われたことがありました。彼ら彼女らはポルトガル語話者です。彼ら彼女らはポルトガル語をしゃべれることが多いから、けっこう英語にも割合とつきやすい。さらに、なかには欧米系の風貌をもっている人も多い。で、その人たちは昔、日本では問題児が多いと言われていたのですが、今は逆にグローバル人材としてむしろ尊敬されるようになってきたのです。その結果として、英語力のある外国人であるとみなされて、昔より多少尊敬・期待されるようになって、高校、大学への進学者も増えているようです。山本先生がおっしゃるように、このこと自体にもいくつかの問題があると思いますが、まあ、この変化には歓迎すべき点もあると考えても

よいのではないのでしょうか。

山本先生は以上の点をあまり評価されてないように思いましたので、こういうのですが、では「グローバル人材とは何ぞや？」というところ、このスライドに引用したのですが、政府文書には、けっこういいこと書いてあるんです。簡潔に言うと「異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力」をもつ人々という訳です。次世代はそうなるべきだというわけです。いい言葉でしょう。だけど、これにも大きな問題があります。「なんでしょう?」。もし、今そのグローバル人材が増えて、日本人が本当にグローバルな存在になったとしても、実は、このグローバル人材というのは常に「外向きなのだ」ということが問題です。つまり日本人は海外からの外国の人(観光や商用で来る人々)と付き合う、あるいは自らが外国に行った時にその文化をよく理解して頑張れよって言うているだけなんです。日本の国際化にしろ、グローバル化に関する議論の多くは、日本人の海外進出のみを考えているのです。だから、今のグローバル人材論のそのような外向きを内向きに変えてみる必要があるのです。そうしたらどうなるでしょう？

すでに日本はグローバル化して外国系の人々沢山生活しているんだから、その人々たちとお付き合いする時にグローバル人材としてお付き合いできるとよいのではないかと思います。だから要するに、国際化とかグローバル化と言うと、すぐ外国に行って頑張るんだという話になってしまうけど、日本国内が国際化、グローバル化しているのだから、日本国内でのお付き合いの時に日本人の多くがグローバル人材として、内向きと外向きのグローバル化に対応するようにすれば、文化共生が多少ともうまく行くかもしれません。まあ、理論上ではそうなるはずですが、現実はどうかわかりません。だけど、とりあえず、今言った方向で進むことも多文化共生の日本での成功のために考えた

多文化共生社会を考える 第2回 民主主義社会オーストラリアは多文化共生社会 !!

ほうがいいのではないかと思います。内向きの国際化、内向きのグローバル人材化によって多文化共生ができるのではないかと思います。

時間が来たので、今日はここで終わりにします。本当はこれから1時間半しゃべりたいのですがね…………。

(拍手)

